

二〇二四年度 大学入学共通テスト 解説〈古典〉

第3問 古文 「車中雪」(『草縁集』所収)

〔出典〕

『草縁集』は、江戸時代後期(一七八四～一八六二)の歌人・国学者(賀茂真淵の弟子である加藤千蔭の孫弟子)で、音楽などにも通じていた、江戸幕府幕臣天野政徳が編んだ歌文集。文政二～三年(一八一九～一八二〇)刊行。短歌・長歌・文章など、同時代の人々の作品(天野自身の作も含む)を集めたもの。今回本文として取り上げられている「車中雪」は、文章を集めた「文部」の「下」の「物語類」に載るもので、作者は、豊前小倉藩藩士秋山光彪(一七七五～一八三二)である。秋山は、天野と同時代の国学者・歌人で、村田春海「賀茂真淵の弟子」門下随一の秀才と言われた人物である。天野と秋山は、いわゆる江戸派(賀茂真淵の門人である加藤千蔭・村田春海などを中心とする和歌・国学一派)の人ということになる。「車中雪」は、ある貴人が、雪の日に、身近な家司たちだけを連れて、桂の別邸へ出かける場面を描いた、擬古物語風の小品である。

〔通釈〕

(ある貴人が)桂の別邸を増設なさったものの、少しの間もお出かけにならなかったところ、降る雪を待つかのような残雪に促されて、不意に(桂へ雪見に行くことを)思い立ちなさった。(いつもは)このような御出歩きには、源少将、藤式部をはじめとして、当世の識者として知られる若者を皆、必ずお呼びになり、付き添わせていたが、にわかに思いついたことであつたので、こう(桂へ出かける)とそれとなく言うことさなさらず、「ただ親しい家司四、五人を連れて(出かけよう)」と心にお決めになる。

すぐに御牛車を引き出したところ、(雪が舞って来たので)「空より花の(冬であるのに空から花が散って来るのは雲の彼方に春が来ているからだろうか)」と、興じていたのに、賞美してゆくにつれて早くも散って消えてしまうのは、このまま止んでしまうということなのであるうか。「それにしても(せっかく出かけて来たのに)実に体裁が悪くがっかりなことだ」と、人々がひどく残念がると、(貴人は)「本当に張り合いがなく残念だ」とお思いになるけれど、「それで引き返すようなことも人に見られたらみっともないことに思われる。やはり法輪寺の八講にかこつけて(出かけよう)」と思うようにおなりになって、ひたすら先を急がせなさるうちに、再び一面に曇って真つ暗闇になって、(雪が)先程よりも格別に散り乱れたので、道の脇に御牛車を立

てさせ（＝止めさせ）ながら御覧になると、何とかいう山も、何とかいう河原も、ほんの少しの間に（雪で真っ白になり）様子が変わってしまった。

（雪が止みかけて）気乗りしていなかった例の人々も、本当にたいそう相好を崩して微笑んで、「これが小倉山の峰であつたら（よいのに）」「そちらはまさに梅津の渡り（のよう）であろう」と、口々に言い合っているが、（一面の銀世界に、雪が積もった）松と竹の違いさえも、うっかりと間違えてしまうに違いない様子である。（貴人は）「ああ、本当に趣深いというのはこのように言うのであろうかね。もう少しここで見て賞美しよう」とおっしゃって、そのまま（牛車の）下簾^{したすだれ}を掲げなさりながら、

ここもまた……この場所もまた月の中にある人里であるに違いない。雪の光もこの世のものとは違って（光り輝いて）いるよ。

などと（和歌を詠んで）興じなざる。そうするうちに、見た目が好ましい子供で水干^{すいかん}を着ている者が、ふうふうと手を吹き暖めながら御車のあとを追って来て、榻^{しじ}のもとにしゃがみ込みながら、「これを御車（の御方）に」と言って差し出したのは、源少将からの御手紙であつたよ。大夫（＝家司の一人）が取り次いで差し上げるのを（貴人は）御覧になると、「いつもは（私のことを）置いてきぼりにはなさらないのに、（今日は）このように（なさるなんて）、白雪の……白雪が降り、振り捨てられたあたり（＝置いてきぼりにされた私のところ）では、（雪ではなく）恨めしい思いばかりが幾重にも積もっていることですよ。

と書いてあるので、（貴人は）微笑みなさつて、畳紙^{たたし}に、

尋め来やと……（あなたが）あとを追って来るかと（思つて）、わざと雪に車の跡をつけながら進んで行ったのに、（私が）待っているとは、あなたは気がつかなかったのでしょうか。

すぐにそこにあつた松を雪を付けたままで折り取りなさつて、その枝に（和歌を書いた紙を）結び付けて（使いの者に）おやりになった。

だんだんと日が暮れかかるうちに、そんなにも雲がかかつて空が一面に曇っていたのも、いつの間にかすっかり晴れ渡つて、月を想起させる名を持つ桂の里の月の光は鮮やかに差し込んで来たので、雪明かりもますます引き立ち、天地の果てまで、銀を叩いて伸ばしたかのようにあたり一面（銀色）にきらきらと輝いて、まぶしいほどに美しい夜の景色である。

桂の別邸の管理を任された人も出て来て、「このように出かけていらつしやるとも知りませんでしたので、すぐにもお迎えに参りませんでしたことよ」などと言いながら、頭も上げないで、むやみに（牛車のあとに）付き従うあまりに、牛の頭の雪をかき払おうとしては、輓^{くびき}に触れて烏帽子^{えぼし}を落とし、御牛車を進めようとする道（の雪）をきれいにしようとしては、残念にも（かえつて）雪を踏み荒らしながら、（寒さのために）足や手の色を海老のように赤くして、桂の里の風に吹かれ、風邪をひきつつ歩いて行く。人々は、「さあ早く（別邸へ）御牛車を引き入れてしまおう。あちらの様子もたいそう見たいので」と言つて、（先を急ごうとして）一斉にそわそわとし合っているが、（風雅を好む貴人は）「本当に（そうだな）」とは思いになるものの、（今いる）この場所（の景色）もやはり見過ごしがたくお思ひになって（いた）。

「解説」

問1 語句解釈の問題

重要単語・重要文法を確認し、必要に応じて前後の文意もふまえて解答したい。

短い語句の意味を問う設問は、「センター試験」で毎年度問1で出題されてきたもので、「大学入学共通テスト」(以下、「共通テスト」)になってもひき続き出題されている。

(ア) 基礎

「あからさまにも」の解釈として最も適当なものを選ぶ。

「あからさまに／も」と単語分けされる。

「あからさまに」は、「仮に・ちょっと・ほんのしばらく」、あるいは「急に・たちまち」などと訳す形容動詞「あからさまなり」の連用形。「あからさまにも…ず(打消)」の形で、「かりにもまったく…しない」と訳すこともある。選択肢の中では③の「少しの間も」が唯一該当する。

よって、正解は③である。

正解 23 ③

(イ) 基礎

「とみのこと」の解釈として最も適当なものを選ぶ。

「とみ／の／こと」と単語分けされる。

「とみ(頓)」は、ここでは、「急なこと・にわかなこと」の意の名詞。「とみなり」と形容動詞に用いることもある「とみのこと」で、「急なこと・にわかなこと」の意となる。ここでは「桂の院」へ行くことを、主人公が「にわかと思いついたこと」であることを言っているのである。

よって、正解は②である。

正解 24 ②

(ウ) 基礎

「かたちをかしげなる」の解釈として最も適当なものを選ぶ。

「かたち／をかしげなる」と単語分けされる。

「かたち」は、「容貌・顔立ち」などと訳す名詞。選択肢の中では⑤の「見た目」がこれに相当する。「外形」や「様子」を言うこともあるが、衣服などのことを言っている場面ではないので①の「格好」は近いようで違っている。「をかしげなる」は、「かわいらしい様子だ・趣深い様子だ」などと訳す形容動詞「をかしげなり」の連体形。「かたち」との続き具合を考えても、⑤の「好ましい」が適当である。よって、正解は⑤である。

正解 25 ⑤

問2 波線部（五箇所）の語句・表現に関する説明問題 標準

波線部 a～e について、語句と表現に関する説明として最も適当なものを選ぶ。

傍線部に関して、語句・表現・内容等、多方面から問う問題で、「共通テスト」になって出題されるようになった新傾向の問題。本年度は、昨年度と同様に、別々の五箇所について問われ、全ての選択肢で文法・敬語について問われた。

① 波線部は「うち興じ／たり／し／も」と単語分けされ、「興じていたのに」と訳される。

「うち興じ」は、「興じる・面白がる」の意のサ変動詞「興ず」の連用形「興じ」に語調を整える接頭語「うち」が冠せられている状態。「たり」は、存続（＝～ている）の助動詞「たり」の連用形である。「しも」は、①が説明しているように、「し」が強意（＝訳さないか、強める言葉を補って訳す）の副助詞、続く「も」が、強意（＝訳さないか、そのまま「も」と訳す）の係助詞であることが多いが、ここは、後方への意味の続き具合を考える

と、「し」は過去（＝くた）の助動詞「き」の連体形、「も」は「ゝのに・ゝても」などと訳す接続助詞と考えて、「興じていたのに」と訳すが、文意がスムーズに通ずる。

よって、「し」を「強意の副助詞」とし、「主人公の喜びの大きさを表している」としている①の説明は正しくない。

② 波線部は「引き返さ／む／も」と単語分けされ、「引き返すようなことも」と訳される。

「む」は、助動詞「む」の連体形。助動詞「む」は終止形も「む」だが、ここは直後に「こと」などの体言を補うことができるので、連体形である。また、助動詞「む」は、推量（＝くだろう）・意志（＝くしよう）・適当（＝くのがよい）などの意を示すこともあるが、このように連体形の場合は、ほとんどの場合、婉曲（＝くような）・仮定（＝くならば、その）の意である。ここは、桂の院へ出かけようと急に思い立って出かけた（本文全体から見ると雪の風景を賞美しなかったようである）が、雪が止んでしまいうさだだったので、出かけてきた甲斐がないと人々とも嘆き始めた折の、主人公の思いを言っているのであり、「引き返さむも人目悪かめり」で、「今さら引き返すようなことも人に見られたらみつともないことに思われる」といった意味である。

よって、②は、「む」の説明にも、「引き返した場合の状況を主人公が考えている」という説明にも、誤りはない。

③ 波線部は「面変はり／せ／り」と単語分けされ、「様子が変わってしまった」と訳される。

「面変はり（おもがはり）」は、名詞で、本来は「歳をとって」顔かたちが変わること」の意であるが、人の顔に限らず、「見た目の様子が変わる」との意でも使われる。「せ」は、「する」の意のサ変動詞「す」の未然形。「り」は、存続（＝くっている）・完了（＝くた）の助動詞の終止形である。ここは、少し前に、「またもつつ闇に曇りみちて、ありしよりけに散り乱れたれば（＝再び一面に曇って真つ暗闇になって、雪が先程よりも格別に散り乱れたので）」とあるので、その雪によって、「何がしの山、くれがしの河原（＝何とかいう山も、何とかいう河原）」も「ただ時の間に（＝ほんの少しの間に）」雪で真っ白になって「様子が変わってしまった」ことを「面変はりせり」と言っているのである。

よって、これを「人々の顔色が寒さで変化してしまった」としている③の説明は誤りである。

④ 波線部は「興ぜ／させ／給ふ」と単語分けされ、「興じなさる。面白がりなさる」と訳される。

「興ぜ」は、「興じる・面白がる」の意のサ変動詞「興ず」の未然形。「させ」は、使役（＝くさせる）・尊敬（＝おくになる・くなさる）の助動詞「さす」の連用形。「給ふ」は、「おくになる・くなさる」と訳す、尊敬の補助動詞「給ふ」の連体形である。本文中で、その動作に尊敬語が使われているのは、主人公だけである（尊敬語が使われていることによって主人公が貴人であることがわかる）から、「給ふ」があることで、この箇所主体が主人公であることがわかる。「させ」が使役であれば、主人公が別の人（同行の人々）を「面白がらせなされた」ということになり、「させ」が尊敬であれば、主人公自身が「面白がった」ことになる。波線部の箇所を見ると、ここは、主人公が「ここもまた」の歌を詠んで「面白がった」というこ

とであり、同行の人々を「面白がらせた・楽しませた」様子は、本文からは見て取れない。よって、「させ」は尊敬と考えるのがよい。「させ」を尊敬とすると、「させ給ふ」は、皇族など極めて高貴な人に使う最高敬語（二重尊敬）ということになり、主人公がそれにふさわしい身分の者であるかどうかが問題になってくる。本文には主人公の身分については何も書かれてはいないが、たとえば本文1～2行目の「思し立たす」、3行目の「思しおきて給ふ」などは、いずれも主人公に対する敬意を示す最高敬語（二重尊敬）の表現と言えるので、波線部の「させ」を尊敬と考えてもかまわないことになる。

よって、「させ」を「使役」とし、「人々を楽しませた」としている④の説明は正しくない。

⑤ 波線部は「大夫／とりつたへ／て／奉る／を／見／給ふ」と単語分けされ、「大夫が取り次いで差し上げるのを御覧になる」と訳される。

「大夫」は、（注3）にあるとおり、「家司」の一人。「とりつたへ」は「取り伝へ」で、「受け取って伝える」、つまり、「取り次ぐ」ことを意味する動詞「とりつたふ（取り伝ふ）」の連用形。「奉る」は、「差し上げる」の意の謙譲の動詞「奉る」の連体形。ここでは源少将からの手紙を「大夫」が「童」から取り次いで、主人公に「差し上げた」ことを意味している。「給ふ」は、「おくになる・なさる」などと訳す、尊敬の補助動詞「給ふ」の連体形。ここは、「見給ふ」で、「大夫」が取り次いだ手紙を、主人公が「御覧になる」という意味である。地の文にある敬語には作者（語り手）からの敬意が込められ、尊敬語は、動作の主体への敬意を示す敬語であるので、この「給ふ」は、作者から主人公への敬意を表していることになる。よって、「給ふ」について「大夫に対する敬意を表している」としている⑤の説明は正しくない。

以上から、正解は②である。

正解 26 ②

問3 和歌に関する内容説明問題 応用（選択肢四つ）

和歌X・Yに関する説明として最も適当なものを選べ。

和歌に関する説明問題は、「センター試験」時代からの頻出の問題で、「共通テスト」になってからも、二〇二一年度本試で三首の和歌に関する内容説明問題、二〇二三年度本試で連歌の解釈に関する説明問題などが出題されている。

Xの歌は「白雪／の／ふり捨て／られ／し／あたり／に／は／恨み／のみ／こそ／千重／に／積もれ／れ」と単語分けされ、「白雪が降り、振り捨てられたあたりでは、恨みばかりが幾重にも積もっているよ」と直訳される。

「ふり捨て」は、「振り捨てて・容赦なく見捨てて」の意の下二段動詞「ふり捨つ（振り捨つ）」の未然形。「白雪の」からのつながりを考えると、「ふり」には「降り」が掛けられていると考えるべきである。「られ」は、受身（ $\llcorner$ される）の助動詞「らる」の連用形。「し」は、過去（ $\llcorner$ た）の助動詞「き」の連体形。この歌が、主人公である貴人から桂行きに誘われなかった源少将が詠んだものであることを考えると、「ふり捨てられしあたり」とは「置いてきばりにされた私のところ」といった意味であることになる。「こそ」は、強意の係助詞。「千重」は、「幾重にも重なっていること」の意。「積もれ」は、四段動詞「積もる」の已然形。「れ」は、存続（ $\llcorner$ ている）の助動詞「り」の已然形（係助詞「こそ」による係り結びの結び）である。「積もる」は「雪」の縁語で、ここで「千重」に積もっているのは「雪」でありそうだが、源少将は「雪」ではなく、桂行きに誘われなかった「恨み」だけが幾重にも積もっていると詠んでいるのである。「白雪が降り、振り捨てられて、置いてきばりにされた私のところでは、雪ではなく、恨めしい思いばかりが幾重にも積もっていることですよ」と、桂行きに誘われなかったことをなじっているのである。

①は、まず、源少将が「主人公の誘いを断った」という事実がない。本文2～3行目に「かうやうの御歩きには、源少将、藤式部をはじめて、今の世の有職と聞こゆる若人のかぎり、必ずしも召しまつはしたりしを、とみのことなりければ、かくとだにもほのめかし給はず、『ただ親しき家司四人五人して』とぞ思しおきて給ふ」とあるのは（いつもは）このような御出歩きには、源少将、藤式部をはじめとして、当世の識者として知られる若者を皆、必ずお呼びになり、付き添わせていたが、にわかと思いついたことであったので、こうとそれとなく言うことさえなさらず、『ただ親しい家司四、五人を連れて』と心にお決めになる」という意味であるから、源少将が「主人公の誘いを断った」のではなく、主人公が源少将を誘わなかったのである。また、「私への『恨み』が積もっているのしょうね」も誤り。歌の解釈で見たように、Xの歌で言っているのは、「（主人公に対する）私の『恨み』が積もっている」ということである。

②は、まず「恋情を訴えた」が誤り。歌の解釈で見たように、Xの歌に「主人公への恋情」は詠まれていない。また、「意外な告白に思わず頬を緩めた」も正しくない。確かに、Xの歌の後に「ほほ笑み給ひて」とあるが、これは、置いてきばりをくって悔しがる源少将の様子を面白く思っ、笑っているのである。

Yの歌は「尋め来／や／と／ゆき／に／し／あと／を／つけ／つつ／も／待つ／と／は／人／の／知ら／ず／や／あり／けむ」と単語分けされ、「尋ねて来るかと進んで行った跡を付けながら待っていたとは、あなたは知らなかったのだろうか」と直訳される。

「尋め来（とめく）」は、字の当てられ方から見て「訪ねて来る」の意の力変動詞である。本文13行目に「童の水干着たるが、手を吹く吹く御あと尋

め・来て（「子供で水干を着ている者が、ふうふうと手を吹き暖めながら御車のあとを追って来て」とあるから、主人公の車のあとを追って来ることを意味していると考えたい。「尋め来」の後の「や」は、疑問（「〜か」）の終助詞（係助詞の文末用法）。「ゆき」は、直後に連用形に接続する助動詞があるから、動詞「行く」の連用形「行き」と考えるべきだが、「雪」が降っている場面であるから、「雪」を掛けていると考えるべきである。「に」は、活用語の連用形に接続する完了（「〜た」）の助動詞「ぬ」の連用形。「し」は、過去（「〜た」）の助動詞「き」の連体形（「ゆきに」）を「雪に」とれば「し」は強意の副助詞として扱うこともできる。「あと」は、「雪」の縁語である「跡」の意。「人」は、世間一般の「人」の意も表すが、和歌では「あなた・あの人」の意でも使われる語。Yの歌は、源少将から贈られてきたXの歌に対する返歌であるから、源少将に対して「あなた」と言っている言葉と考えると歌意がわかりやすくなる。「知ら」は、「知る・わかる」の意の動詞「知る」の未然形。「ず」は、打消（「〜ない」）の助動詞の終止形。その後の「や」は、疑問（「〜か」）の係助詞。「けむ」は、過去推量（「〜ただろう」）の助動詞の連体形（係助詞「や」による係り結びの結び）である。Yの歌は、「置いてきばりにされたのは恨めしい」という、源少将のXの歌に対する、主人公からの返歌であるから、それをふまえると、「あなたがあとを追って来るかと思って、わざと雪に車の跡をつけながら進んで行ったのに、私が待っているとは、あなたは気がつかなかったのでしょうか」という意味であることになる。

③は、「源少将が待つ桂の院」が誤り。①でも見たように、主人公の桂行きの際に源少将は置いてきばりをくったのである。主人公の行き先である「桂の院」にいるはずはない。なお、それ以外の③の説明は、和歌の直後に「やがてそこなる松を雪ながら折らせ給ひて、その枝に結びつけてぞたまはせたる（「すぐにそこにあつた松を雪を付けたままで折り取りなさつて、その枝に和歌を結び付けておやりになった）」とあることから、誤りがないことになる。

④は、Yの和歌の解釈で見たとおり、「ゆき」の掛詞についての説明にも、歌意の説明にも、主人公が源少将に贈ったとする説明にも誤りがない。以上から、正解は④である。

正解 27 ④

問4 解説文（現代文）に関する空欄補充問題（選択肢四つ）

次に示すのは、「桂」という言葉に注目して本文を解説した文章である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

本文二つ、もしくは、本文と引用文をふまえて考えさせる問題は「共通テスト」新傾向の問題である。また、複数の人物（教師・生徒など）の対話に関する問題は、前年度に続いている出題である。

(i)

空欄 **I** に入る文章として最も適当なものを選び。

標準

空欄の前後を見ると、空欄 **I** を含む「」の箇所は、本文12行目の「ここもまた……」の和歌の解釈になっていることがわかる。

「ここもまた……」の和歌は、「ここも／また／月／の中／なる／里／ならし／雪／の／光／も／よ／に／似／ざり／けり」と単語分けされ、「この場所もまた月の中にある人里であるに違いない。雪の光もこの世のものとは違って（光り輝いて）いるよ」という意味である。

「なる」は、断定の助動詞「なり」の連体形。断定の助動詞「なり」は、一般に「である・うだ」と訳すが、このように直前が場所を示している場合は「～にある・～にいる」と訳すこともある。「ならし」は、断定の助動詞「なり」に推定の助動詞「らし」が接続した「なるらし」が縮まったもので、「～であるらしい・～であるに違いない」などと訳す。「よに」は「世に」で、「まったく・たいそう」の意の副詞とすることもできる表現だが、ここは「この世に」の意と考えて、「世に似ざりけり」で「この世（＝現実の世界・地上の世界）に似ていない、別世界（＝月の世界）のものだなあ」の意と解釈するのがよい。「ざり」は、打消（＝～ない）の助動詞「ず」の連用形。「けり」は、詠嘆（＝～なあ）の助動詞の終止形である。

空欄 **I** を含む「」の箇所は、**I** の直前までが上の句「ここもまた月の中なる里ならし」の解釈ということになるから、空欄 **I** には下の句「雪の光もよに似ざりけり」の解釈が入ることになるが、この下の句は「雪の光もこの世のものとは違って（光り輝いて）いるよ」という意味であるから、選択肢の中でこれに相当するのは②である。雪明かりが「よに似ざり」（＝この世のものとは思えない）から、「ここ」は別世界である「月の中なる里」なのだろう、と詠んでいるのである。

よって、正解は②である。

正解 **28** ②

(ii)

空欄 **II** に入る文章として最も適当なものを選び。

標準

空欄の前後を見ると、空欄 **II** には、本文20～22行目に描かれている情景の説明が入ることがわかる。

本文20～22行目は、「やうやう／暮れかかる／ほど、／さばかり／天霧らひ／たり／し／も、／いつしか／なごりなく／晴れわたり／て、／名／に／負ふ／里／の／月影／はなやかに／差し出で／たる／に、／雪／の／光／もいとどしく／映えまさり／つつ、／天地／の／かぎり、／白銀／うち／のべ／たら／む／が／ごとく／きらめきわたり／て、／あやに／まばゆき／夜／の／さま／なり」と単語分けされ、「だんだんと日が暮れかかるうちに、そんなにも雲がかかって空が一面に曇っていたのも、いつの間にかすっかり晴れ渡って、月を想起させる名を持つ桂の里の月の光は鮮やかに差し込んで来たので、雪明かりもますます引き立ち、天地の果てまで、銀を叩いて伸ばしたかのようにあたり一面銀色にきらきらと輝いて、まばしいほどに美しい夜の景色である」という意味である。

「やうやう」は、「だんだん・徐々に」の意の副詞。「ほど」は、現代語と同様に「程度」も示すが、「時・うち・頃」「あたり」「身分」などの意でも使われる名詞。「さばかり」は、「それほど・そんなにも」の意、「天霧らひ」は、(注13)にあるとおり「雲や霧などがかかって空が一面に曇る」こと。「たり」は、存続(＝～ている)の助動詞「たり」の連用形。「し」は、過去(＝～た)の助動詞「き」の連体形。「なごりなく」は、「残すところなく全て」の意。「晴れわたり」「きらめきわたり」の「わたり」は、動詞「わたる(渡る)」の連用形で、ここはいずれも「一面に～する」の意の補助動詞の用法。「名に負ふ」は、「名として持っている」、または「有名だ」の意の表現で、問4(ii)では全ての選択肢で「月を想起させる名を持つ桂の里」と説明されているのがこれに相当する。「月影」は、「月光・月」のこと。「影」は、本来「光・姿」の意である。「たる」は、存続(＝～ている)の助動詞「たり」の連体形。「に」は、「～と・～しころ・～ので・～のに」などと訳す接続助詞。「いとどしく」は、「ますます～だ」の意の形容詞「いとどし」の連用形。「映えまさり」は、「ますます月の光が雪に照り映えている」ことを言っている表現。「白銀」は、「銀」のことで、「雪」の白さを言う表現として現在でも使うものである。「うちのべ」は、「伸ばす」の意の下二段動詞「のぶ(伸ぶ)」に語調を整える接頭語「うち」が冠せられた「うちのぶ(うち伸ぶ)」の連用形。「たら」は、存続(＝～ている)の助動詞「たり」の未然形。「む」は、婉曲(＝～ような)の助動詞「む」の連体形。「～がごとく」は、「～のように」の意。「ごとく」は、比況(たとえ)の助動詞「ごとし」の連用形である。「あやに」は、形容動詞「あやなり」の連用形。「あやなり」は「目にもあやなり」のかたちで使われることが多く、「(まばしいほどに)立派だ・はなやかだ」、または「(見ていられないほどに)ひどい」の意である。「まばゆき」は、形容詞「まばゆし」の連体形。現在の「まばゆい・まばしい」に相当するが、直前の「あやに」とほぼ同意で「(まばしいほどに)立派だ・美しい」「(見ていられないほどに)ひどい・恥ずかしい」などの意を表す。「なり」は、断定(＝～である)の助動詞の終止形である。

雲の晴れ具合については、「天霧らひたりしも、いつしかなごりなく晴れわたりて(＝雲がかかって空が一面に曇っていたのも、いつの間にかすっかり晴れわたって)」とあるから、②の「いつの間になくなり」、④の「跡形もなく消え去り」は正しいが、①の「わずかな隙間が生じ」、③の「少しずつ薄らぎ」は正確な説明になっていない。また、各選択肢の後半で説明されている、月の光が雪に照り映えている様子については、②の説明

が「いとどしく（＝ますます）」「くわたり（＝あたり一面）」などの訳も正しく反映されていて誤りがない。この説明については、①も大きな誤りはないが、「一筋の」「雪の山」といった説明は、本文に即した正確な説明とはいえない。また、③の「雪が、その月の光を打ち消して」、④の「空に散りばめられた銀河の星が」は、本文にない内容である。

よって、正解は②である。

正解 29 ②

(iii)

空欄 Ⅲ に入る文章として最も適当なものを選ぶ。

応用

空欄の前後を見ると、空欄 Ⅲ には、本文 23～26 行目に描かれている主人公の様子説明が入ることになるが、各選択肢を見ると、主人公の様子だけではなく、「院の預かり」や、同行の「人々」の様子説明も入ることがわかる。

本文 23～26 行目は、「院の預かりも出でて、『かう渡らせ給ふとも知らざりつれば、とくも迎へ奉らざりしこと』など言ひつつ、頭ももたげで、よろづに追従するあまりに、牛の額の雪かきはらふとは、軛に触れて烏帽子を落とし、御車やるべき道清むとては、あたら雪をも踏みしだきつつ、足手の色を海老になして、桂風を引き歩く。人々、『いまはとく引き入れてむ。かしこのさまもいとゆかしき』とて、もろそき／＼にそきあへるを、『げにも』とは思すものから、ここもなほ見過ぐしがたうて」と単語分けされ、「桂の別邸の管理を任された人も出て来て、『このように出かけていらつしやるとも知りませんでしたので、すぐにもお迎えに参りませんでしたことよ』などと言いながら、頭も上げないで、むやみに（牛車のあとに）付き従うあまりに、牛の額の雪をかき払おうとしては、軛に触れて烏帽子を落とし、御牛車を進めようとする道（の雪）をきれいにしようとしては、残念にも（かえって）雪を踏み荒らしながら、（寒さのために）足や手の色を海老のように赤くして、桂の里の風に吹かれ、風邪をひきつつ歩いて行く。人々は、『さあ早く（別邸へ）御牛車を引き入れてしまおう。あちらの様子もたいそう見たいので』と言って、（先を急ごうとして）一斉にそわそわとし合っているが、（風雅を好む貴人は）『本当に（そうだな）』とはお思になるものの、（今いる）この場所（の景色）もやはり見過ごしがたお思いになって（いた）」という意味である。

「院の預かり」は、（注 14）にあるとおり、「桂の院の管理を任された人」のこと。「渡ら」は、「行く・来る・通る」などの意の動詞「渡る」の未然形。「せ給ふ」は、尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」に、尊敬の補助動詞「給ふ」が接続した、最高敬語（二重尊敬）を示す表現で、「おくになる・

「なさる」などと訳す。二箇所にある「ざり」は、いずれも、打消（＝く）の助動詞「ず」の連用形。「つれ」は、完了（＝くた）の助動詞「つ」の已然形。「ば」は、已然形に接続して、確定条件を示し、「くところく」などで訳す接続助詞。二箇所にある「とく」は、いずれも、「早く」の意の副詞。「奉ら」は、「く申し上げる・おくする」などと訳す、謙譲の補助助詞「奉る」の未然形。「し」は、過去（＝くた）の助動詞「き」の連体形。「もたげ」は、「もたげる・もち上げる・起こす」の意の動詞「もたぐ」の未然形。「で」は、「くないで・くなくて」の意の接続助詞。「よろづに」は、「すべてに・万事に」の意の副詞。「追従する」は、ここでは「牛車の後について行く」こと。「軛（くびき）」は、（注12）にあるとおり、牛車を牛につなげる箇所のこと。「やる」は、「（あちらへ）やる・（遠くへ）送る」の意の動詞「やる（遣る）」の終止形。「べき」は、推量（＝く）だろう・くしそうだ・くはずだ・意志（＝くしよう・くするつもりだ）・当然（＝くべきだ）・予定（＝くことになっている）などの助動詞「べし」の連体形。「清む」は、「清める・きれいにする・掃除する」の意の動詞の終止形。「あたら」は、「惜しくも・残念なことに」の意の副詞。「踏みしだき」は、「踏み荒らす・強く踏む」の意の動詞「踏みしだく」の連用形。「海老になして」は、（注15）にあるとおり、「海老のように赤くして」という意味。「桂風を引き歩く」は、問4の解説文の第5段落にあるとおり、「桂の木の間を吹き抜ける風（桂の里に吹く風）」の意である「桂風」が吹く様子を示す表現に、「風邪を引く」の意を掛けた表現。「引き入れ」は、ここでは、牛車を邸内へ「引き入れる」の意を表す動詞「引き入る」の連用形。「て」は、強意（＝きつと・必ず）・完了（＝くしてしまう）の助動詞「つ」の未然形。「む」は、意志（＝くしよう）の助動詞の終止形。「かしこ」は、「あちら・あそこ」の意。「いと」は、「たいそう・とても」の意の副詞。「ゆかしき」は、「心ひかれる・見たい・聞きたい・知りたい」などと訳す形容詞「ゆかし」の連体形。「もろそき」は、（注16）にあるとおり、「一斉にそわそわする」の意。「あへ」は、四段動詞「あふ（合ふ）」の已然形で、ここは「互いにくし合う」の意を表す補助助詞の用法。「る」は、存続（＝くっている）の助動詞「り」の連体形。「げに」は、「本当に・なるほど」の意の副詞。「思す（おぼす）」は、「お思いになる」の意の動詞「思す」の連体形。「ものから」は、「くけれども」、または「くので」の意の接続助詞。「なほ」は、「やはり」、または「それでもなお」の意の副詞。「見過ぐし」は、「見過ぐす・見ながらそのままにする」の意の四段動詞「見過ぐす」の連用形。「がたう」は、「難しい・くできない・くにくい」の意の形容詞「かたし（難し）」の連用形「かたく」の語尾がウ音便化した「かたう」の「か」が濁ったもの。現在でも「信じがたい」などと使う語である。

選択肢の中で、説明が該当箇所の内容と合致するのは、③である。「軽率にふるまって主人を迎えようとする院の預かり」は、「院の預かりも出で来てくよろづに追従するあまりに、牛の額の雪かきはらふとは、軛に触れて烏帽子を落とし、御車やるべき道清むとは、あたら雪をも踏みしだきつつ」などに、「すぐに先を急ぐとする人々」は、「人々、『いまはとく引き入れてむ。かしこのさまもいとゆかしきを』とて、もろそきにそそきあへる」に相当していて、説明に誤りがない。主人公の様子を表す「ここも見過ぐしがたうて」は、他の人々が気に留めないような景色にも感じ入っている様子を言っているのであるから、「主人公の風雅な心が表現されている」という説明も正しいことになる。ちなみに、「風雅・風流」という

のは、一般に、「自然（花鳥風月）を愛でる心」や、「詩歌音曲を好む心」をもつことを言う。

①は、「足手の色」を気にして仕事が手につかない」や「休息をとろうとする」が本文になく、「その場に居続けようとする」主人公の態度を「律儀な性格」と評しているのも正しくない。②は、まず、「院の預かりを放っておいて」が本文にない。また、「院の預かりの体調を気遣う」も本文にないので、主人公の態度を「温厚な人柄」と評しているのも正しくない。④は、まず「都に帰りたくて」が本文にない。「人々」は一刻も早く「桂の院」へ行こうとしているのである。また、主人公について「周囲の人を気にかけない」、「悠々とした姿」と評しているのは、そうととれなくもないように見えるが、そうだと断言できるだけの証拠となる表現が本文中に見つからない。

以上から、正解は③である。

正解

30

③

第4問 漢文

杜牧「華清宮」・蔡正孫『詩林広記』・程大昌『考古編』

「書き下し文」

【詩】

長安より回望すれば繡堆を成す
山頂の千門次第に開く
一騎紅塵妃子笑ふ
人の是れ荔枝の来たるを知る無し

【資料】

I 『天宝遺事』に云ふ、「貴妃荔枝を嗜む。当時涪州貢を致すに馬通を以てし、馳載すること七日七夜にして京に至る。人馬多く路に斃れ、百姓之に苦しむ」と。

II 『晁山詩話』に云ふ、「明皇遠物を致して以て婦人を悦ばしむ。人力を窮め人命を絶つも、顧みざる所有り」と。

III 『遜齋閑覧』に云ふ、「杜牧の華清宮詩尤も人口に膾炙す。唐紀に拠れば、明皇十月を以て驪山に幸し、春に至りて即ち宮に還る。是れ未だ嘗て六月には驪山に在らざるなり。然るに荔枝は盛暑にして方めて熟す」と。

IV 『甘沢謡』に曰はく、「天宝十四年六月一日、貴妃誕辰、駕驪山に幸す。小部音声に命じて楽を長生殿に奏し、新曲を進めしむるも、未だ名有らず。会南海荔枝を献じ、因りて荔枝香と名づく」と。

【通釈】

【詩】

長安からふりあおぎ眺めると（驪山は）綾絹を重ねたような美しさだ。
山頂の千もあるたくさんの門が次々に開けられる。
一騎の早馬が砂煙をたてて（到着し、それを見て）楊貴妃がほほえむ。
その早馬が荔枝を届けに来たことを、人は知らない。

【資料】

I 『天宝遺事』に（次のように）言っている、「楊貴妃は荔枝を好んだ。当時（荔枝は）南方の涪州に産し、貢献するにあたっては（本来は公文書を運ぶための）早馬を用い、荔枝を乗せて駆けること七日七夜で都に着いた（という）。（その輸送のために）人も馬もかなりの数が途中で倒れて死ぬほどで、民衆はこの荔枝の輸送に苦しんだ」と。

II 『晝山詩話』に（次のように）言っている、「玄宗は遠方からの珍物（Ⅱ荔枝）を（都に）取り寄せて楊貴妃を喜ばせた。（そのために）多くの人員の力を用いて苦しみ、命を落とさせることもあったが、顧みないこともあった」と。

III 『遼斎閑覧』に（次のように）言っている、「杜牧の『華清宮』の詩は、（杜牧の数ある詩の中でも）最も広く知れわたっている。唐代の歴史記録によれば、玄宗は十月に驪山に行幸し、春になってから王宮に帰った（という）。これによれば（玄宗と楊貴妃は）六月には驪山にいなかった（ことになる）。それなのに、荔枝は夏の盛りになって熟する（ものであるから、驪山に荔枝を届けたというのは、どうなのであろうか）」と。

IV 『甘沢謠』に（次のように）言っている、「天宝十四年六月一日、楊貴妃の誕生日に、皇帝の乗り物が驪山に行幸した（Ⅱ玄宗と楊貴妃は驪山に行った）。（その折）宮廷の少年歌舞音楽隊に命じて、長生殿で音楽を演奏し、新しい曲を進上させたが、（その曲には）まだ名前がついていなかった。たま（そこに）南海郡から荔枝が献上され、そのために（その曲を）『荔枝香』と名づけた」と。

【解説】

問1 漢詩の形式名と押韻の判断の問題 基礎

この【詩】の形式と押韻の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

【詩】は、一句が七文字で、四句で構成されているから、形式は「七言絶句」である。①・②・③は「七言律詩」（律詩は八句で構成）になっているから消去できる。

選択肢後半は「押韻」の問題である。原則として、五言の詩は偶数句の末尾字、七言の詩は、第一句末と偶数句末が押韻する。

「押韻（韻をふむ）」とは、決められた位置の語の音のひびきをそろえる決まりで、（日本語の音よみでは百パーセント同じでないこともあるが）ひとまず●の字を音よみしてみる。「堆（タイ・tai）」「開（カイ・kai）」「来（ライ・rai）」で、「アイ（ai）」というひびきでそろっている。第三句末の「笑」は「ショウ・sho」で、他の三つとひびきが合っていない。

(例) 五言絶句

☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐
☒	☐	☒	☐

七言絶句

☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐
☒	☐	☒	☒

(●が韻字)

正解 31 ⑤

問2

語の意味の判断の問題

(ア) 基礎

(イ) 基礎

(ウ) 基礎

波線部(ア)「百姓」・(イ)「膾炙人口」・(ウ)「因」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)「百姓」は、漢文の学習では、「故人(＝旧友)」「左右(＝側近の臣)」「夫子(＝先生)」「寡人(＝私・王侯の自称)」などと並んで、最重要単語の一つである。日本語でいう(ひやくしやう)(＝農民)ではなく、「ひやくせい」と読み、「人民。多くの人民。民衆」の意。「多くの役人」の意味で用いることもあるが、「人民」の意が大事である。「庶人(しよじん)」も同義語である。①「民衆」が正しい。

(イ)「膾炙人口」は訓点があり、「人口に膾炙す」と読む。「膾」は「なます(魚貝や獣の生肉を細かく切ったもの。あるいは、薄く切った魚肉を酢に浸したもの)」、「炙」は「火であぶった(焼いた)肉」のこと。誰もが口にして美味とするものであることから、「広く人々の口にのぼってもてはやされる」意に用いる慣用句となっている。④「広く知れわたっている」が正しい。

(ウ)「因」は、「よりて」あるいは「よつて」。前に述べた内容をうけて、それが原因・契機となって事態が展開することを示す。「そのために」「そこで」「こうして」などの意である。①「そのために」が、文脈の上からも妥当である。

正解 (ア) 32 ① (イ) 33 ④ (ウ) 34 ①

問3 返り点の付け方と書き下し文との組合せ問題 標準

傍線部「窮人力絶人命、有所不顧。」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

この形式の問題は、「センター試験」時代から頻出する形式なのであるが、ポイントは、傍線部の中に、再読文字や、疑問・反語・否定・使役・受身などの何らかの句法上の読み方の特徴がないかということ、書き下し文のように読んだときの文意が通るか、また、その文意が前後の文脈にあてはまるかどうか、である。返り点は、本当はどのような返り方（付け方）が文の構成上アリなのか？ ということはあるのであるが、ともかく読み方どおり返っているようにについているケースがふつうなので、返り点の付け方をチェックするのは時間の無駄である。

句法上のポイントというほどのことではないが、後半の「有（あり）」「所（ところ）」「不（ず）」は、いずれも返読文字（必ず返って読む字）である。よって、「顧（かへりミル）」からは、一字ずつ、

有所不顧

と返ることになり、「顧みざる所有り」と読むことになる。

前半については、「人力」「人命」は二字の熟語で、体言と見られ、「窮（きはム）」「絶（たツ）」は動詞であるから、

窮人力絶人命

と返り点がつくと考えられる。

よって、正解は④「人力を窮め人命を絶つも、顧みざる所有り」である。

これらのことが判断できなければ、各選択肢の「書き下し文」のように読んだ場合の意味を考えてみて、「文意が通るか」をチェックしてみることになるが、①・②・③・⑤は、の部分で文意が通らない。

- ① 人力の人命を絶たんとするを窮めて、所として顧みざる有りと。
- ② 人の力めて絶人の命を窮むるは、有れども顧みざる所なりと。
- ③ 窮人の力は絶人の命にして、有る所顧みざるのみと。
- ④ 人力を窮め人命を絶つも、顧みざる所有りと。

- ⑤ 人を窮めて力めしめ人を絶ちて命じ、所有るも顧みずと。

正解 35 ④

問4 【資料】をふまえての詩句の解釈の問題 標準

【詩】の第三句「一騎紅塵妃子笑」について、【資料】Ⅰ・Ⅱをふまえた解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

【資料Ⅰ】は、楊貴妃が荔枝を好んだため、南方から早馬で七日七夜かけて都へ運ばせ、そのために人も馬も途中で倒れることもあり、民衆が苦しんだ、という内容である。

【資料Ⅱ】は、玄宗が楊貴妃を喜ばせるために遠方から荔枝を運ばせ、多くの人力を費し、人命を損うこともあった、という内容である。

「一騎紅塵妃子笑」の、「紅塵」には（注4 Ⅱ砂煙）、「妃子」には（注5 Ⅱ楊貴妃のこと）と、（注）があるから、「荔枝を届けるための早馬が砂煙をたてて（到着し）、それを見て楊貴妃は笑う」という意味である。

よって、正解は④。

- ① 玄宗のため楊貴妃が手配した荔枝を早馬が砂煙を上げながら運んで来る。それを見て楊貴妃は笑う。
 ② 楊貴妃のため荔枝を手に入れようと早馬が砂煙のなか産地へと走りゆく。それを見て楊貴妃は笑う。
 ③ 楊貴妃の好物の荔枝を運ぶ早馬が宮殿の門の直前で倒れて砂煙を上げる。それを見て楊貴妃は笑う。
 ④ 玄宗の命令で楊貴妃の好物の荔枝を運ぶ早馬が砂煙を上げ疾走して来る。それを見て楊貴妃は笑う。
 ⑤ 玄宗に取り入りたい役人が荔枝を携えて砂煙のなか早馬を走らせて来る。それを見て楊貴妃は笑う。

①・②・③・⑤は、の部分が間違いである。

正解 36 ④

問5 【資料Ⅲ・Ⅳ】の内容の判断の問題 応用

【資料】Ⅲ・Ⅳに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

【資料Ⅲ】は、玄宗は、十月に驪山（華清宮）に行幸し、翌年の春王宮に帰ったので、六月には驪山にはいなかった。つまり、驪山に荔枝を運ばせたという詩の内容は、どうなのであろうか、と疑問を投げかけている。

【資料Ⅳ】は、天宝十四年六月一日の楊貴妃の誕生日に、華清宮の長生殿で音楽をもよおした折、南海郡から荔枝が献上された話である。これからすれば、六月に驪山に行ったことはあり、そこで荔枝も献じられたということになる。

選択肢の、【資料Ⅲ】について、【資料Ⅳ】についてを、それぞれチェックする。

① 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との一致によって、【詩】の描写が事実^xに符合することを指摘する。【資料】Ⅳは、玄宗一行が夏の華清宮で賞玩したのは楽曲「荔枝香」であったことを述べており、【資料】Ⅲの見解に反論する根拠となる。

② 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との一致によって、【詩】の描写が事実^xに符合することを指摘する。【資料】Ⅳは、夏の華清宮で玄宗一行に献上された荔枝が特別に「荔枝香」と名付けられたことを述べており、【資料】Ⅲの見解を補足できる。

③ 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との不一致によって、【詩】の描写が事実^xに反することを指摘する。【資料】Ⅳは、夏の華清宮で玄宗一行に献上された「荔枝香」が果物の名ではなく楽曲の名であることを述べており、【資料】Ⅲの見解を補足できる。

④ 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との不一致によって、【詩】の描写が事実^xに反することを指摘する。【資料】Ⅳは、玄宗一行が「荔枝香」という名の荔枝を賞味した場所は夏の南海郡であったことを述べており、【資料】Ⅲの見解を補足できる。

⑤ 【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との不一致によって、【詩】の描写が事実^xに反することを指摘する。【資料】Ⅳは、「荔枝香」という楽曲名が夏の華清宮で玄宗一行に献上された荔枝に由来すると述べており、【資料】Ⅲの見解に反論する根拠となる。

【資料Ⅲ】の説明は、①・②と、③・④・⑤の、2対3の配分があり、これは、③・④・⑤の「不一致」が正しい。

【資料Ⅳ】の説明も、①・②には間違いがあり、③・④も~~~~~の部分に間違いがある。

正解 37 ⑤

問6

【資料】をふまえた【詩】の鑑賞の正否の判断の問題

応用

【資料】をふまえた【詩】の鑑賞として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

【詩】 および 【資料】 I～IVの読解をふまえた上の、本文全体と内容合致の問題である。これも、各選択肢をチェックしてキズを見つけて消去してゆくしかない。

① 驪山の華清宮を舞台に、開放される宮殿の門、公文書を急送するはずの早馬、楊貴妃の笑みと、謎めいた描写が連ねられたうえで、それらが常軌を逸した荔枝の輸送によるものであったことが明かされる。事実無根の逸話をあえて描き、玄宗が政治を怠り宮殿でぜいたくに過ごしていたことへの憤慨をおちまけている。

② 驪山の遠景から華清宮の門、駆け抜ける早馬へと焦点が絞られ、視点は楊貴妃の笑みに転じる。笑みをもたらししたのは不適切な手段で運ばれる荔枝であった。事実かどうかわからない部分があるものの、玄宗と楊貴妃の逸話を巧みに用い、玄宗が為政者の道を踏み外して楊貴妃に対する情愛に溺れたことを慨嘆している。

③ 驪山の山容や宮殿の門の配置を詳しく描き、早馬が上げる砂煙や楊貴妃の笑みなどの細部も見逃さない。早馬がもたらすであろう荔枝についても写實的に描写している。玄宗と楊貴妃に関する事実を巧みに詠み込んでおり、二人が華清宮でどのような生活を送っていたかについての歴史的知識を提供している。

④ 美しい驪山に造営された華清宮の壮麗さを背景に、一人ほほ笑む楊貴妃の艶やかさが印象的に描かれたうえで、ほほ笑みをもたらしした荔枝の希少性について語られる。事実かどうかわからないことを含むものの、玄宗が天下のすべてを手に入れて君臨していたことへの感嘆を巧みに表現している。

⑤ 驪山に建つ宮殿の門は後景に退き、ほほ笑む楊貴妃の眼中には一騎の早馬しかない。早馬がもたらそうとしているのは、玄宗が楊貴妃とともに賞味する荔枝であった。事実かどうかわからない問題をせず、玄宗と楊貴妃の仲睦まじさが際立つ逸話を用いることで、二人が永遠の愛を誓ったことを賛美している。

①・③・④・⑤は、～の部分に本文の内容とは合致しないキズがある。

正解

38

②